

漢字基底語の現代における位置

吉 村 弓 子

1. はじめに

現代日本語の表記は、漢字かな交じり文であるが、どの語を漢字で、あるいはかなで表すか、という、漢字とかなの守備範囲は、時代の流れによって、あるいは、1923年の常用漢字表、1946年の当用漢字表、1981年の常用漢字表によって、移り変わってきた。

かつて漢字で表された語が現代では平がなで表される時、その変遷の要因はいくつか考えることができる。まず、その漢字が漢字表に含まれていないということが掲げられる。つぎに、その漢字は表内であるが、その語を表す音・訓が表外だという場合がある。後者は語の品詞が左右していることが多く、1981年常用漢字表の音・訓は、感動詞・助動詞・助詞のためのものは含まず、代名詞・副詞・接続詞のためのものは広く使われるものだけを含んでいる。

このような漢字群、すなわち、漢字自体は表内だが上記のような品詞の語を表す訓は表外という漢字が、現代日本語においてどのような位置にあるかを明らかにすることが、本稿の目的である。

林(1980)は「わたしたちが漢語を使うときに、用いられる漢字を、意味上非常にやさしいことばに置き換える用意をもちながら使っている」ことを指摘している。これを踏まえ、林は「漢語を使う際、多くの人の意識の底に存在するとおぼしいことば」を漢字の「基底語」、「基底語をずばり1語指定するのはむずかしいが、多くの人が認知する共通の意味があり、語にすればいくつかの語にわかれざるをえない場合」を「基底意味」と呼んでいる。

漢字の基底語・基底意味は次のように5種に分類されている。

- (1) 基底語が明瞭に認められるもの
- (2) 基底語から基底意味へ移りつつあるもの
- (3) 基底意味としてとらえるべきもの
- (4) 特別な過程を経て別種の基底語を得たもの
- (5) 基底のとらえがたいもの

これを見ると、基底語と基底意味は一線を画したのではなく連続体であることがわかる。しかも、それを認知する側の年齢や漢文の知識にも左右され、時代とともに変化するものであると、林は述べる。

分類(1)は、当用漢字音訓表にのっている訓が安定した地位を占める。しかし、訓の有

無が決定的な分類基準とはならない。表外訓でも、「現在では、まだ、多くの人に訓と意識されているにちがいないもので、基底語の働きをしているもの」があると主張され、「庫：くら」「護：まもる」「貯：たくわえる」「恒：つね」がその例として掲がっている。これと同じ性格をもつが、訓としての意識がこれほどは強くないために(3)に分類されたものとして、「育：はぐくむ」「赦：ゆるす」「製：つくる」「視：みる」などがある。一方、音訓表にのっていても、その訓が古風になったために(2)に入れられた「健：すこやか」「速：すみやか」もある。(2)には、現代では意味をなさなくなった旧訓「県：あがた」「台：うてな」「段：きだ」「帳：とばり」などもある。後者は、「もし、古来の訓が今も生きていたとしたら、立派に基底語として働くはずであった、そういう一群の訓」という特徴をもつ。

本稿が問題とするのは、かつて、感動詞・助動詞・助詞などを表した漢字に、現代の我々が接するとき、もはや、その意味を見出せないのか、また、これらの語が語要素となって形成された字音語が現代において高い頻度で用いられる場合、我々はその字音語の中に、元の語の意味を認識しているのか、ということである。

以上の二点に答えるべく、助詞「より」を表していた漢字「従」と、それが語要素となる字音語「従来」をとりあげて、微視的な考察を行ってみる。「従来」という語の基底構造²⁾は規定しにくい、「前から今まで。これまで。」という意味のうち、時の起点を「従」が、継続を「来」が担っていると考えられる。その根拠は、前者は「より」後者は「このかた」という助詞に、求めることができる。

現代日本人は、「従」という漢字から「より」という基底語／基底意味を想起するのだろうか。「従来」という語の要素「従」に「より」という基底語／基底意味を認識しているのだろうか。ちなみに、『朝日新聞の用語の手びき』(1981)「誤りやすい慣用句」には「『従来』だけで『以前から今まで』。『から』『より』は不要。」と、とりあげられている。

2. 基底意識の実験

2.1 資 料

実験の質問を設定するために用いたのは、国立国語研究所『現代新聞の漢字』および、そのクイック一覧と原文である³⁾。

国立国語研究所の報告は1976年に刊行されたが、そこで使われたデータは1966年のもので、けっして新しいとはいえない。しかし、つぎの二つの点で、この資料が現在のところ最も信頼できるものであると判断した。第一に、データ量の大きいこと。朝日・毎日・読売の一年分をサンプリングし、約100万字をあつかっている。第二に、各漢字の用法が分析・提示してあること。用法を記述したものとしては、最新の資料である。

『現代新聞の漢字』で「従」を引くと、次のようになっている。

使用頻度順位 715 位
使用度 297 度
△ジュ 2/1
接辞的用法 従一(～〇位)

ジュウ 218/16

自立用法 従(〇〇は主で〇〇は～)

結合用法 従価(～税) 従業 61 従軍 従事 12 従前 従属 従来 122 従量(～による課税)/侍従 主従 専徒 追従 服従 盲従 類従(群書～)

△ショウ 1/1

結合用法 従容

したがう 74/2

自立用法 従う 47 従って 27

特殊訓 いとこ 1/1 従弟

人名・地名 1/1

人名 伊従

△：当用漢字音訓表改定(1973)で加えられた音・訓
音・訓の次に示した数字：延べ度数／異なり度数
語の次に示した数字：使用度数

上の記述から、確認できることは、「従り」という助詞の例が皆無であること、「じゅう」という音の結合用法が最も多く、なかでも「従来」が122度と頻出していることである。

「従来」という語が新聞のなかでどのように用いられたかを調べるためには、クイック(文脈付用語総索引。KWIC (Key Word In Context の略))を参照すればよい。クイックで「従来」を検索すると、この語の前15字、後ろ30字程度を含む実例が122ならんでいる。もっと大きい文脈がみたいときは、原文カードに当たる。

『朝日新聞の用語の手びき』が誤りとしている「従来から」は、クイック検索によって7例存在することがわかった。

(1) 社会保険事務所では、従来から事業所の調査を行ない事業主の届け出などの適正を期しておりますが、六十万事業所千八百万人について完全に調査を行なうことは、きわめて困難であります。

(2) 前尾氏を、ムリヤリに党三役から追い、閣内の閑職にとどめ、内閣の責任を分担させ、従来から親佐藤系とみられていた福永健司氏を総務会長にひき抜いたわけだ。

(3) ホー大統領のラダクリシュナン大統領あて書簡の内容は、従来から主張して来た強硬態度をあらためて明らかにすることに主眼を置き、それとともにインドがインドシナ国際監視委員会の議長としてベトナム平和回復のため特別の責任を負っている、と述べているものようである。

(4) ホー・チミン北ベトナム大統領のアピールおよび部分動員令の布告は従来からの北ベトナムの強硬態度から当地の外交筋にはそれほどの衝撃を与えてはいないが、ベトナム戦争の平和解決の希望は一層遠のいたと失望の色を深めている。

(5) 中共のベトナム戦への介入の可能性について米政府は、従来から米軍が現在の限定戦略をとり続ける限り、中共の積極的介入はありえないとみていた。

(6) 北洋漁業安定のための漁獲量長期とりきめは日本側の従来からの一貫した強い希望

である。

(7) 従来からその動向の注目されている二十歳代の男性では、前回は自民・社会支持が五分五分だったが、今回は自民支持がふえた。

2.2 実験の方法

実験の被験者は筑波大学共通科目「国語」受講生の45名で、所要時間は約20分であった。実験の実施に際して注意したことは、4部からなっている質問紙の順に回答し、前に戻って書き加えたり訂正したりしないということであった。

各質問と、そのねらい、および回答に予測されることは、以下の通りである。

I. 各漢字の読みを思いっただけ書いてください。

(1) 自 (2) 於 (3) 迄 (4) 従

(漢字1字を見ただけで、助詞としての用法を想起するか否かを探る問である。基底意識をみるためには、じつは、各漢字の意味を尋ねるべきである。第1節で林の指摘にあるように、訓の有無は基底語・基底意味分類において絶対的な要因ではないからである。しかし、ここでは答えやすいという便宜から、読みを問うことにした。「従」のほかに助詞として用いられた歴史をもつ漢字を3字出題したのは、実験の意図をばかすという目的と、回答に慣れるということをかねそなえている。特に比較を試みるものではないが、助詞専用に使われる(2)(3)は、多くの用法を持つ(1)(4)よりも、助詞としての訓を想起しやすいことが予想される。)

II. 下線部の読みを書いてください。

(1) インドに於ては、この初期の仏教の芸術は、これに先立つ叙事詩時代のそれからの自然な成長であった。

(2) 憂ひ、中従り来る。

(3) 我日本古より今に至る迄哲学無し。

(4) 朋有り遠方自り来たる、亦た樂しからずや。

(問Iと同じ漢字が文中にはいった場合に助詞の訓を想起させるか否かを調べるものである。漢字は単独では読みをいくつも当てうるが、文の中では意味の制約により読みも限定される。そこで、助詞としての訓の回答は、問Iよりも多くなると思われる。)

III. 下の各文で「従来」「従来から」が使えるかどうかを判定し、非文に*、容認可能性の低いものに?を、語頭につけてください。どちらも文法的だと思ふ場合で好んで使う方があれば、そちらを丸で囲んでください。

(この質問では、「従来」115例から選んだ7例と「従来から」の实例(1—7)(本稿14—15ページ)とを無作為に並べ、全14例について下記(8)の形で示し判断を求めた。原文が「従来」だった例は、以下の(8—14)である。)

(8) {従来/従来から} 良品は本場鳴門ワカメと相場のきまったものだが、鳴門が主産地だったのは昔の話。いまや本場のカンバンは完全に岩手、宮城の三陸沿岸に移り、全産額の八割余を占めている。

(9) この若さにあふれるエネルギーがあったればこそ、従来の常識にとられない独自の方法を生み、過酷な自然を克服して奇蹟の油田を出現させたともいえる。

(10) いま、各団地単位で、加入の話がすすめられているグループ保険は、従来、会社、工場など職場単位で集団加入していたものです。こんどの団地保険は、職場のかわりに居住地区を対象としており、わが国初めてのグループ保険です。

(11) ハノイ、ハイフォンの石油貯蔵所爆撃はベトナム戦争のエスカレーションとはみない。むしろ、米国の従来の政策の継続である。

(12) 高校の入試科目を国、数、英の三教科にするか、理、社、を加えた五教科にするか、従来通り九教科にするか……それぞれ意見があってまだ結論が出ていないが、これについて提案してみたい。

(13) 春闘の際、実際に民間給与が改定される時期は、従来は四月中が圧倒的に多かったが、最近はややずれて五月に移行する企業もかなりある。

(14) 保守と革新が激しく対決しながらも、ウラで取引きが繰り返されてきた国会のなれ合い劇も、これら第三党勢力の進出により幕をひくことになりそうだが、総選挙後の国会運営は従来と違って困難も予想される。

(問Ⅰ・Ⅱで「従」に「より」を回答した被験者は、「従来」の語要素「従」の意味を認識しており『従来』だけで『以前から今まで』、『から』『より』は不要。」と判断して、*や?を多くつけるのではないかと、予想した³⁾。

原文で「従来」が使われていたものについても同様の容認性を示すかどうかを見るために、(8—14)を混ぜた。観点を変えると、誤用であるはずの「従来から」が偶然につかわれたのか否かを検討しようということにもなる。もし偶然なら、回答は原文とは無関係になるだろう。何か理由があって、むしろ必然的に「従来から」の方が用いられたのなら、回答の分布は原文の用法にそうことになるだろう。)

Ⅳ. 以下に漢字「従」で始まる2字の熟語をペアにしてあげます。それぞれの語における「従」の意味を考え、aの意味とbの意味を、くらべてください。2つの意味が「よく似ている」ものには〔3〕点、「あまり似ていない」ものには〔2〕点、「全く似ていない」ものには〔1〕点、という3段階の評定をし、()内に点数を記入してください。

(ここで扱った熟語は次の7語である。従来、従事、従業、従軍、従属、従順、従前。これを2語ずつ組み合わせてできた21通りを無作為に並べ、以下の形で提示した。)

1. () a. 従事
b. 従業
2. () a. 従順
b. 従前

(「従」の意味は、「従来、従前」は「より」、そのほかは「したがう」を想定している。したがって、前群内・後群内の評定値は高く、両群間の評定値は低いことが予測される。

問Ⅲと同様、問Ⅰ・Ⅱで「より」を回答した被験者の方が、上記の予測にあてはまる傾向が強いと思われる。)

3. 結果と考察

3.1 助詞「より」の認識

質問Ⅰ・Ⅱで、助詞「おいて、まで、より」と回答のあった数は表1の通りである。()内の数字は「おいて、まで、より」以外の回答数である。質問Ⅰでは「思いつくだけ」答えることを求めたため、延べ回答数は被験者数の45をこえる。たとえば、「於」に対する「おいて」は42、その他の回答は10で、延べ52となる。「自」に対しては「じ、し、みずから、おのずから」、「従」に対しては「じゅう、したがう、したがって」などがあつたが、ここでは各読みに至るまでは立ち入らず、「より」以外の回答の総数を()内に示すにとどめる。

数字の右に付けてある「**」は、「おいて、まで、より」と答えた群と答えなかった群の分布の偏りが偶然でないと、統計的に1%の水準で検証されたことを示す。

表1 助詞の読み(回答数)

	I. 単独	II. 文中
於 おいて	42**(10)	44**
迄 まで	42**(5)	44**
自 より	8**(111)	37**
従 より	7**(86)	21

予測通り、漢字単独で提示した場合、専ら助詞として使われる漢字「於・迄」は、助詞を表す訓を想起しやすいことが明らかになった。一方、その他の用法を表す音・訓の多い「自・従」は、助詞としての訓を想起することが極端に少ない。

質問Ⅰの回答とⅡを比べると、どの漢字もⅡの方が、すなわち、文中にある方が、助詞としての訓の回答数が多い。これは2つの場合が考えられる。1つは、助詞を表す訓を知っているが質問Ⅰでは思い出さず、Ⅱで具体的な文を見て想起したというものである。もう1つは、訓の知識は無いが、文意から類推したというものである。

同じ「より」でも、質問Ⅱで「自」の方が「従」よりも回答数が多いのは何故であろうか。助詞を表す用法が「自」により強く残っていると考えることもできるが、質問で用いた文「朋有り遠方自り来たる、亦た楽しからずや。」が被験者にとって馴染深いであろうことも見逃せない。上記の文は原文に忠実な表記だが、これを「遠方従り」としても、同じような回答を得たかもしれない。「自」と「従」を比較検討することは本稿の主眼ではないが、助詞を表した漢字群の中での「従」の位置を確認するためには、文の熟知度が干渉しないように出題文を操作することが必要となる。

3.2 「従来」における「従」の認識

質問Ⅲの仮説、すなわち、質問Ⅰ・Ⅱで「従」を「より」と読んだ被験者の方が「従来から」という表現に許容度が低い、ということを検討するためには、以下のように分析した。

「従来から」に対する?と*の回答を集計し、質問Ⅰで「より」を回答した7名と回答しなかった38名の2群、および、質問Ⅱで回答した21名と回答しなかった24名の2群、

それぞれについて検定を行った。その結果、質問ⅠもⅡも有意差は無く、「より」と読めるか否かということと「従来から」という表現を容認するか否かということは、無関係であることが判明した。

質問Ⅲのもう1つの出題意図、「従来」と「従来から」に対する容認性の分布を見るためには、同一被験者の「従来」に対する評価と「従来から」に対する評価をくらべ、許容度が高い方を集計するといった方法をとった。

表2の例文番号(1—7)は原文で「従来から」が(本稿14—15ページ),(8—14)は「従来」が用いられている(本稿15—16ページ。番号の右に付けた**は1%水準で,*は5%水準で、「従来/従来から/なし」の分布の偏りが偶然ではないと検証されたことを示す。太い線で囲んである部分が、分布の偏っている方である。各数字は容認性がより高いと判定された被験者の数である。

表2 「従来/従来から」の容認可能性

例文番号	従 来	従来から	な し
1**	5	33	7
2	16	19	10
3**	8	31	6
4	22	12	11
5	12	14	19
6**	0	44	1
7**	10	28	7
8**	26	10	9
9*	24	13	8
10**	34	6	5
11**	10	30	5
12**	43	2	0
13**	42	2	1
14**	43	0	2

14例中、3例(2, 4, 5)を除いた11例については分布に偏りがあり、その中、わずか1例だけ(11)が原文の用法とくい違っている。被験者は何かの規則をもって「従来」と「従来から」を使い分けしているようである。

「従来から」に分布が偏った5例を見渡すと「従来から」は「過去から現在へわたる時の幅」を表していると考えられる。

(1)……従来から事業所の調査を行い事業主の届け出などの適正を期しておりますが、……

(3)……従来から主張して来た強硬態度をあらためて明らかにすることに……

(6)……従来からの一貫した強い希望である。

(7) 従来からその動向の注目されている……

(11)……むしろ、米国の従来の方針の継続である。

一方、「従来」に偏った6例を見ると、「従来」は「過去のある時点」を指しており、以下のように現時点との対比がみられる。

(8) 従来、……鳴門が主産地だったのは昔の話。いまや……岩手、宮城の三陸沿岸に移り、……

(9)……従来の方針にとらわれない独自の方法を生み、……

(10) 従来、……職場単位で集団加入していたものです。こんどの……職場のかわりに居住地区を対象としており、……

(12)……三教科にするか、……五教科にするか、従来通り九教科に……

(13)……従来は四月中が圧倒的に多かったが、最近はややずれて五月に移行する……

(14)……総選挙後の国会運営は従来と違って困難も予想される。

つまり、「従来から」と「従来」の使い分けの要となるのは、「現在につながるか否か」ということである。

3.3 語要素「従」の認識

質問4の回答は表3のようにまとめられる。各数字は評定値の平均で、数値が高いほど意味が似通っていることを示す。**は1%水準で、*は5%水準で、評定の偏りが偶然ではないことが検証されたことを示す。

表3 「従」の意味の同異

	従事	従業	従軍	従属	従順	従前	従来
従事		2.84**	2.40**	2.04**	1.93**	1.49**	1.29**
従業			2.53**	2.16**	1.67**	1.44**	1.13**
従軍				2.22**	1.91	1.60**	1.22**
従属					2.31*	1.72*	1.20**
従順						1.60**	1.47**
従前							2.30*
従来							

上掲の表には太い線で囲まれた部分が2か所あるが、これは、左の方は特に意味が近いと評定されたもの、右の方は特に意味が異なると評定されたものということが、統計的手法によって判明した。予測したように、「従来、従前」は他の語との距離が大きい。「した

がう」という意味をになっていると想定した語群の中でも、「従事、従業、従軍」は特に互いに意味が似ていると評定され、「従順」はこの3語にはあまり似ていないとされた。

このような結果を招いた要因は、各語の基底構造と品詞の違いではないかと思われる。「従事、従業、従軍」は、〔NにVする(こと)〕を基底構造とする名詞/サ変動詞である。「従順」は〔VしAだ〕を基底構造とする形容動詞である。この2群の中間に位置する「従属」も、また異なる基底構造〔VしVする〕をもつ名詞/サ変動詞である。

以上のことを考慮に入れると、「従来、従前」が1つの群を形成したのは、この語における語要素としての「従」の意味ではなく、この2語だけが副詞であるという品詞による可能性があることも、全く否定することはできない。

質問Ⅰ・Ⅱの回答との関連は、統計的手法を用いて質問Ⅲと同様に分析したが、その結果、全く相関がみられなかった。

4. 結 論

「従」に「より」という基底語/基底意味が認識されているかどうかを、大学生に対する実験(「従」を「より」と読めるか、「従来から」という表現に違和感をもつか、「従～」という2字漢語における語要素「従」の意味「したがう」と「より」の違いを判別できるか)を通して、考察した。実験の結果、「従」は単独で示した場合には読めない者が多く、それが含まれた文として提示されると読める者は半数位となることがわかった。「従来から」という表現は辞書も掲載しておらず、誤用であると指摘する手びきもあるが、実験の結果をみる限りでは、「従来」と「従来から」には意味上の使い分けがあると思われる。筆者の推論は、「従来」は、「かつて」や「昔」と同じように過去の時点のみ指し、それに「から」をつけて初めて、辞書が「従来」の意味として掲げる「前から(今まで)」になる、というものであった。2字漢語の語要素「従：したがう、より」は判別されたが、基底構造や品詞の影響も無視できないと思われる。

以上の考察から、「従：より」は、「従：したがう」と同一視することは、さすがにないものの、基底語と認めるには頼りないことが明らかになった。旧訓「より」は、漢字「従」と切り離してしまえば、現代日本語の助詞として立派に活躍している。この点で、馴染のない「県：あがた」「台：うてな」等とは性格を異にする。起点を表す助詞としては、「から」に比べると、やや古風な感じがする⁴⁾。表外訓で、かつ古風ということになると、大学生にとって、もはや基底意味となっているといわなければならないだろう。

注

- 1) 林(1978a)(1978b)(1981)
- 2) クイック一覧と原文は国立国語研究所の野村雅昭氏の御厚意により閲覧できた。
- 3) 影山(1980)は、漢語動詞や和語複合動詞を考察しているが、語内部に編入された目的語や補語は文中に二重に出現することは許されないと指摘している。

* 旅に旅立つ。

* 腰を腰掛ける。

この規則を適用すると、「従来から」の非容認性が説明できる。

しかしながら、次のような語彙的な例外もあり、影山は任意的編入などによって生成する。

名を名乗る。

妻をよめる。

大学に入学する。

富士山に登山する。

自衛隊に入隊する。

サッカー部に入部する。

つまり、前述した規則は絶対的なものではないわけだが、そのことが質問Ⅲでの予想を完全に否定するものではない。

- 4) 歴史的にも、「より」の方が古い。時間的空間的に動作の起点を表す「から」は、「中古に『より』と接近してできた用法で、中世後しだいに盛んになり、ついに『より』を圧して現代に及ぶ」(小学館『古語大辞典』)

参考文献

- 朝日新聞社用語幹事(編)(1981)『朝日新聞の用語の手びき』朝日新聞社
林 四郎(1978a)「漢字使用の基底構造」『言語行動の諸相』明治書院
——(1978b)「漢字研究の一視点」『文芸言語研究・言語篇』2
——(1980)「漢字基底語考」『文芸言語研究・言語篇』5
——(1981)「漢字を評価するための観点」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館
影山太郎(1980)『語彙の構造』松柏社
国立国語研究所(1976)『現代新聞の漢字』

付 記

本稿は、第8回筑波大学国語国文学会大会(昭和59年)での研究発表に加筆修正したものである。会場で貴重な御教示をくださった先生方、資料を快く使わせてくださった野村雅昭先生、実験の方法と分析について指導してくださった芳賀純先生、そして、草稿段階で数々の御助言をくださった林四郎先生に、心から感謝致します。

(大学院博士課程応用言語学)